

アジアの諸帝国の繁栄

「世界の一体化」にともなって国際交易が^{こうえき}発展するなか、アジアでは、オスマン帝国・サファヴィー朝・ムガル帝国・清朝など、広大な領土をもつ諸帝国が繁栄した。

Q▶ これらの諸帝国に共通することは何だろうか。また、それぞれどのような特徴があったのだろうか。

①オスマン帝国は、ビザンツ帝国から引き継いだ中央集権的な統治制度と、トルコ的な軍事力をあわせもつ国家として、強化化した。

②ティマール制は、ビザンツ帝国のプロノイア制(→p.123)や、西アジアのイクター制(→p.111)の流れをくんでいる。

③大宰相のような要職の多くも「スルタンの奴隷」が占めた。また、オスマン帝国の常備軍は「スルタンの奴隷」からなり、鉄砲や大砲などの火器で武装した歩兵部隊(イエニチェリ)などが編制された。

④イランではイル＝ハン国の時代に簿記術が発達した。それを学んだオスマン帝国の書記たちは、新領土の農民と農産物に関する調査をおこない、支配に貢献した。

オスマン帝国とサファヴィー朝

Q▶ オスマン帝国の領土となった諸地域は、どのように結びついていたのだろうか。

オスマン帝国の成立

Q▶ オスマン帝国の基礎は、どのように築かれたのだろうか。

14世紀初め頃、イル＝ハン国の支配から独立したトルコ系の諸政権とビザンツ帝国が攻防するアナトリア西部に、オスマン^{Osman}を始祖とする国家が誕生した。この国家は君主であるスルタンを中心にバルカン半島で勢力を広げ、^{1300頃～1922}1366年にはアドリアノーブル^{Osman しそ ? ~1324?}を首都にした。バイジット1世^{Bayazit I 在位1389～1402}は、1402年に西進してきたティムールとのアンカラの戦いに敗れたが、後継者らがまもなく勢力を回復させた。とくにメフメト2世^{Mehmet II 在位1444～16.51～81}は1453年にコンスタンティノーブル(のちのイスタンブル)を攻略し、ビザンツ帝国を滅ぼした。これ以後、オスマン帝国は長い歴史をもつこの都市を首都として、バルカン半島とアナトリアに中央集権的な支配をしいた①。

オスマン帝国初期の拡大を支えたのは、トルコ系の騎士(シパーヒー)

だった。帝国は彼らに征服地の農地の徴税権などを分与するかわりに軍役を課し(ティマール制②)、中央政府に結びつけた。その一方で、帝国は支配地域のキリスト教徒から人材を登用し、「スルタンの奴隷」として厚遇した③。また、先進的なイランの書記技術④を導入し、ウラマーを司法や行政に活用する体制を整えた。



イエニチェリ 「スルタンの奴隷」からなるオスマン帝国常備軍の歩兵部隊。

14世紀末に創設されて以来、帝国の征服事業に活躍した。バルカン半島のキリスト教の子弟を強制的に徴募する

デウスルメによって、編制された。

162 第10章 アジアの諸帝国の繁栄

1396年に、バイジット1世はニコポリスの戦いでバルカン諸国とフランス・ドイツの連合軍を撃破した。



オスマン帝国とサファヴィー朝の最大領域



ウィーン包圍戦 オスマン帝国はハンガリー征服後、その王位をめぐるハプスブルク家と対立し、1529年にウィーンを包圍したが、カール5世(→p.184)の抵抗や冬季の到来により2カ月で撤退した。

オスマン帝国の拡大

▶ オスマン帝国の拡大は、どのように進んだのだろうか。

16世紀に入ると、西アジアでは、エジプト・シリアをおさめるマムルーク朝、バルカン半島・アナトリア西部のオスマン帝国、イラン高原に台頭したサファヴィー朝が覇権を競った。オスマン帝国はセリム1世のもとでサファヴィー朝と争い、アナトリア東部を支配下に入れた。さらに帝国は南進し、1517年にマムルーク朝を滅ぼしてシリア・エジプトを領有するとともに、それまでマムルーク朝が保持していたイスラーム教の両聖都メッカとメディナの保護権も獲得した。

オスマン帝国は、つづくスレイマン1世のもとでも積極的な拡大政策を推し進めた。彼はハンガリーを征服し、ハプスブルク家がおさめるオーストリアのウィーンまで軍を進めた。また、新たに海軍を編制し、ヴェネツィアなどの艦隊を破って(プレヴェザの海戦)、北アフリカに至る地中海の制海権を得

た。さらに、サファヴィー朝とイラク地方の領有を争ってバグダードを獲得するとともに、紅海を経てインド洋にも艦隊を派遣した。



⑤ この1529年のウィーン包圍戦(第1次)はヨーロッパ諸国に衝撃を与え(→p.184)、以後もオスマン帝国はヨーロッパの国際関係に影響を与え続けた。

⑥ のちオスマン海軍は1571年にレバントの海戦(→p.186)でスペインやヴェネツィアなどに敗れるが、まもなく勢力を回復して、地中海の制海権を維持した。

スレイマン=モスク 16世紀半ば、スレイマン1世の命でイスタンブールに建造されたオスマン帝国様式のモスク。ドームの構成がハギアソフィア聖堂のもの(→p.94)とよく似ている。

拡大後のオスマン 帝国下の社会

Q▶ オスマン帝国はどのような統治をおこない、人々はどのように暮らしていたのだろうか。

17世紀になると、オスマン帝国の東西への拡大は終わり、領土は安定した。それにともなって、帝国の税制はティマール制から徴税請負制へと変化した。徴税請負は中央政府の官僚やウラマー、さらに軍人たちによって担われた。しかし、18世紀になると徴税請負制下の周辺地域で富と権力の集中が進み、各地に有力者(アーヤーン)が台頭した。

①カーヌーンは、徴税や住民の義務など、統治に関わる分野を規定した。

②これはイスラーム諸王朝に共通する仕組みであるが、オスマン帝国の場合、とくにミッレト制と呼ぶこともある。

オスマン帝国の人々は、イスラーム法とそれを補完するスルタンの法(カーヌーン①)のもとに暮らした。また、イスラーム法はキリスト教徒やユダヤ教徒に対する支配の原則も定めていたため、帝国支配下の両教徒は、それぞれの宗教共同体の法に従って暮らすことを保障され、イスラーム教徒と共存した②。オスマン帝国のスルタンは、強大な権力を持つ専制君主だった。

オスマン帝国内では、東西交易や首都イスタンブルでの需要などから、各地に毛織物・綿布・生糸・絨毯などの特産品が生まれ、都市が成長した。商品の生産・販売にあたる都市の商工業者は、宗教の区別をこえて組合(エスナーフ)を構成した。一方、長距離交易や首都への物品の供給に従事する者には特権が与えられ、そこではキリスト教徒やユダヤ教徒の大商人も活躍した。また、帝国とヨーロッパとの交易では、スルタンから商業活動や居住の自由などのカピチュレーションと呼ばれた特権を認められたヨーロッパ商人が活躍した③。

③オスマン帝国を経由して、ヨーロッパにコーヒーや絨毯、チューリップ、軍楽隊の音楽などの文物も伝わった。

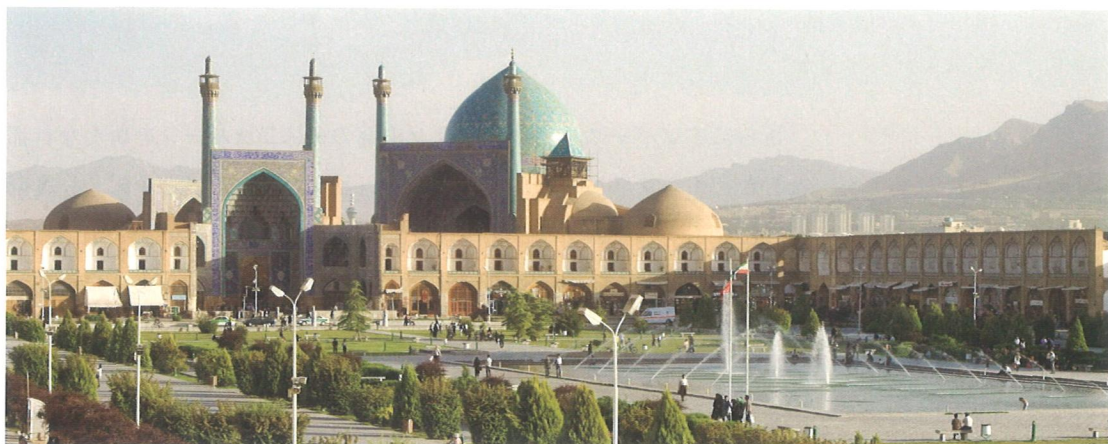
オスマン帝国の都市では、様々な民族や宗教が共存し、音楽・芸能・食文化などで融合が進んだ。建築においても、ビザンツ帝国のハギア＝ソフィア聖堂などになったドームを特徴とするオスマン帝国様式のモスクが各地に建設された。一方、絵画や文学では、優美なイラン文化の影響を強く受けた作品が生み出された。

『良書』にみるオスマン帝国の「乱れ」

Q▶ これは、17世紀初めにオスマン帝国で著された筆者不詳の政治論の一節である。筆者は、世の乱れは大宰相のせいだとしている。なぜ王(スルタン)を非難しないのだろうか。

先祖の代から言われてきた言葉に、「魚は頭から腐る」というのがある。まさに答えはそこにある。この世における反乱と秩序の喪失は、我々の王が、大宰相によき人を得ることができず、実際に大宰相になった人物が、悪事を働き、賄賂をとって、この世のすべての悪しきおこないと前例の改悪、違法行為の表れに、直接の原因となっていることからもたらされた。

(著者訳)



イスファハンの「王の広場」 サファヴィー朝のアッバース1世は、イスファハンを首都に定めたとき、この「王の広場」を新市街の中心に位置づけた。東西150m、南北500mで、闘争やボロの競技などに用いられた。後方に建つのが「王のモスク」で、建物の表面はアラベスクが描かれたタイルでおおわれている。現在はそれぞれ「イマームの広場」「イマームのモスク」と呼ばれている。イマームとはアリーの血を引くシーア派の指導者の称号。



イマームのモスク



「イマームのモスク」(正面入り口) モスクは、精密なアラベスクが描かれた青を基調とするタイルでおおわれている。

サファヴィー朝とイラン社会

Q サファヴィー朝のもとで、イラン社会はどのように変化したのだろうか。

15世紀後半、イラン高原北西部やアナトリア東部のトルコ系遊牧民のあいだでは、過激な神秘主義(スーフィズム)を掲げるサファヴィー教団が支持を広げた。教主イスマーイール(1世)は騎馬軍団を率いてイラン高原全域に勢力を拡大し、16世紀初めに、タブリーズを占領してサファヴィー朝を建てた。

サファヴィー朝は、アナトリア東部やイラクの支配をめぐってオスマン帝国と争った。しかし、王朝の騎馬軍団はチャルディラーンの戦い(1514年)で鉄砲や大砲を駆使したオスマン軍に敗れ、アナトリア東部はオスマン帝国に帰属した。またスレイマン1世にはイラク地方を奪われた。

サファヴィー朝の支配者(シャー)は、トルコ系遊牧民の支配層に支えられる一方、在地のイラン人の官僚も重用し、両者の協力を得て都市と農村を統治した。16世紀後半に即位したアッバース1世は、部族単位のトルコ系騎馬軍団をおぎなうものとして、オスマン帝国にならって奴隷軍人からなる王直属の軍団を編制し、オスマン帝国から一時的にイラクを奪い返すなど、サファヴィー朝の最盛期を現出させた。

この時代には、ポルトガルをホルムズ島から追放することにも成功した。

④ 彼らは、おもにコーカサス出身のグルジア人やアルメニア人であった。

①イラン産の絹糸は、オスマン帝国の地中海岸の都市にもたらされ、ヨーロッパ商人により購入された。

②十二イマーム派は、12代目の「隠れイマーム(指導者)」がいつか再臨して、この世に正義をもたらすとする思想をもつ。

③パーブルは支配者としてすぐれていただけではなく、ペルシア語やアラビア語の教養にも深く、彼の回想録である『パーブル＝ナーマ』はトルコ語系のチャガタイ語(→p.149)による散文を代表する作品である。

④ムガルの名称は「モンゴル」を意味する語句が転化したものだが、その由来については諸説がある。

バーニーパットの戦い 中央の馬上の人物がパーブル。



さらにアッバース1世は、イラン中部のイスファハーンを新たな首都とした。イスファハーンは「世界の半分」とうたわれるほど繁栄し、庭園や彩色タイルのモスクなどが都市を飾った。また、詩・絵画・工芸などの芸術が発達した。手工業の分野では、イラン産の絹糸がとくに高値で取引され、それを用いて織られた絨毯なども各地で重用された①。

宗教面では、サファヴィー朝の支配層は、建国当初の独自の信仰にかえてシーア派の穏健な一派である十二イマーム派②の教えを受け入れ、シリアから宗教家をまねくなどしてシーア派信仰の整備につとめた。この結果、しだいにイランやアゼルバイジャンにシーア派信仰が浸透した。

ムガル帝国の興隆

Q ムガル帝国の興隆と衰退は、南アジアにどのような影響をもたらしたのだろうか。

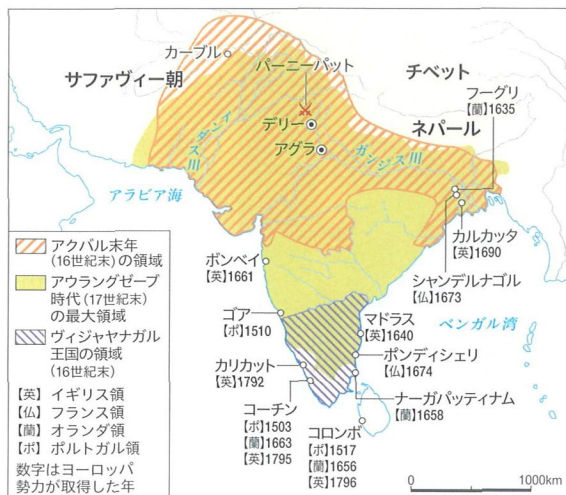
ムガル帝国の成立と インド＝イスラーム文化

Q ムガル帝国において、ヒンドゥー教徒とイスラーム教徒はどのような関係だったのだろうか。

16世紀前半の南アジアでは、中央アジア出身でティムールの子孫であるパーブル③が、カーブルを拠点にして北インドに進出した。彼は1526年のバーニーパットの戦いにおいて鉄砲や大砲などの火器を使用し、デリー＝スルタン朝最後のロディー朝に勝利をおさめ、イスラーム王朝であるムガル帝国④の基礎を築いた。

ムガル帝国の実質的な建設者は、第3代皇帝アクバルである。アクバルは支配階層の組織化をはかり、彼らに官位を与えて等級づけ、それに応じて維持すべき騎兵・騎馬数と給与を定めるマンサブダール制を導入した。さらに、全国の土地を測量して徴税をおこなう制度を導入し、中央集権的な統治機構を整え、また首都をアグラに移した。

15～16世紀には、イスラーム教とヒンドゥー教との融合をはかる信仰が生まれた。不可触民への差別を批判し、人類が根本的に1つであることを説いたカビールや、カーストの区別なく解脱できると説いて、シク教の開祖となったナーナクが登場した。



ムガル帝国の領域

象に乗ってガンジス川を渡るアクバル
アクバルの年代記『アクバル＝ナマ』の挿し絵。



アクバルは、信仰と統治の両面でヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の融和をはかって支配の基盤を固めようとし、非イスラーム教徒に課されていた人頭税(ジズヤ)を廃止して、ヒンドゥー勢力を味方につけた。

文化面でも融合への積極的な動きがみられた。ムガル宮廷にはイラン出身者や南アジア各地の画家がまねかれ、細密画を含む装飾写本が多数生み出された。各地の王の宮廷では、地方語による作品が生み出されるとともに、ペルシア語への翻訳が進んだ。公用語のペルシア語と地方語がまざったウルドゥー語も誕生した。建築においても、インド様式とイスラーム様式が融合したタージ＝マハルなどの壮大な建築物がつくられた。

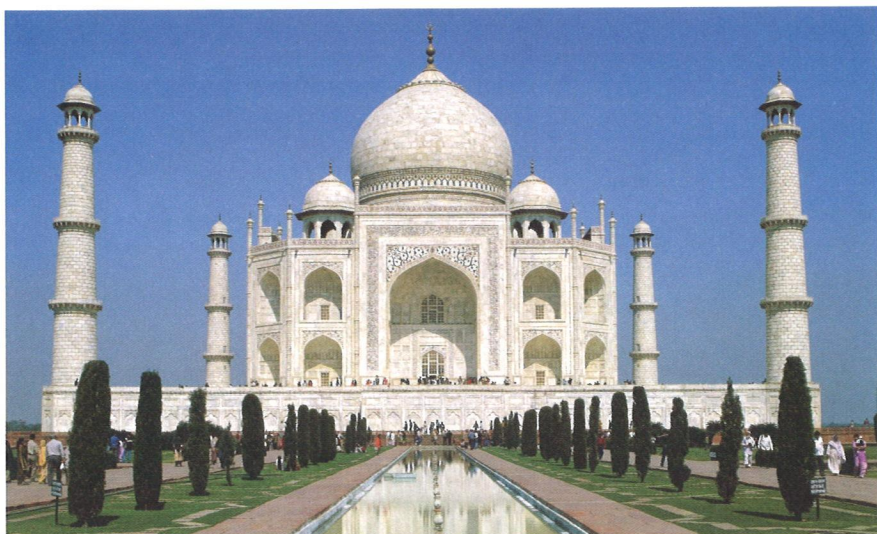
デカン高原には、14世紀にヒンドゥー王朝のヴィジャヤナガル王国が誕生し、インド洋交易を通じて西アジアから馬を大量に入手して軍事力を高め、南インドにおいて支配を拡大した。しかし、イスラーム勢力との抗争によって17世紀には衰退し、その後、南インド各地で地方勢力の自立化が進んだ。

ムガル帝国時代の細密画
ムガル帝国第5代皇帝シャー＝ジャハーン(在位1628～58)の年代記であり、現在は一部しか残っていない『バードシャーの書』に描かれた細密画。1639年頃。最上階中央の窓に

いるのが皇帝。
ムガル帝国はインド文化とイスラーム文化が融合したインド＝イスラーム文化の隆盛期。

⑥ウルドゥー語は、現在パキスタンの国語となっている。

ミニチュール(細密画)の影響を受けて、宮廷では貴族的なムガル絵画が、地方ではヒンドゥー的な要素を加えたラージプート絵画が盛んに制作された。



タージ=マハル ムガル
皇帝シャー=ジャハーン
によって妃ムターズ=
マハルのために造営され
た墓廟。均整のとれた全
体の姿はもちろん、大理
石を用いた浮き彫りや透
かし彫り、貴石をはめこ
んだ壁などで装飾され、
インド=イスラーム建築
の代表とされる。



タージ=マハル
の壁面装飾

インド地方勢力の台頭

Q ムガル帝国の衰退には、どのような要因があっ
たのだろうか。

ムガル帝国は、第6代皇帝Aurangzeb**アウラングゼーブ**の時代に最大の領土とな
った。しかし、その治世には支配の弱体化も進んだ。ムガル支配層は、
農村や都市で展開されていた活発な商品生産には積極的に関わらず、地
租の徴収を強化するだけであった。また、イスラーム教に深く帰依した
アウラングゼーブは、ヒンドゥー教寺院の破壊を命じたり、**人頭税**を復
活するなどして、ヒンドゥー教徒からの反発をまねいた。

こうしたなか、各地で農民反乱が生じ、また地方勢力が着実に力をつ
けて独立への動きを示した。西インドではヒンドゥー国家の建設をめざ
す**マラーター王国**が登場し、**西北インド**では**シク教徒**が強大化した。18
世紀初めにアウラングゼーブが死去すると、ムガル帝国は解体に向かい、
ベンガルやデカンなど、各地に独立政権が生まれた。

インド西部の諸侯集団
マラーターの指導者
シヴァージが建った。



シク教の黄金寺院
17世紀初めに完成
された、インド北
西部のアムリッ
サルにあるシク
教の総本山。黄金
寺院の名称は、19
世紀初めに教典の
章句を刻んだ金箔
でおおわれたこと
に由来する。

清代の中国と隣接諸地域

3

Q 清代の政治と社会の特徴は何だろうか。また、清朝の皇帝が従来の中国王朝の皇帝と異なるのはどのような点だろうか。

多民族国家・清朝

Q 清朝の領土にはどのような民族が含まれ、どのように統治されていたのだろうか。

16世紀以降の動乱のなかで、新式の火器が東アジア各地に広まり、強力な軍事力をもつ新興勢力が生まれてきた。その1つが清朝である。

1644年、**李自成**が明を滅ぼすと、東北国境で清軍の侵入を防いでいた明の武將**吳三桂**は清軍に降伏し、清軍は長城内に入って北京を占領した。

北京を都とした清は中国全土を征服し、南方の諸省に**吳三桂**ら3人の漢人武將を配置して藩王とした(三藩)。一方、東南沿海で武装貿易船団を率いて清に抵抗していた**鄭成功**とその一族は、1661年にオランダ人を駆逐して台湾を占領し、これを拠点とした。

その後、清が三藩の撤廃をはかると、**吳三桂**らは1673年に反乱をおこした(三藩の乱)が、第4代の**康熙帝**によって81年に鎮圧された。また、康熙帝はきびしい海禁政策をとって鄭氏の財源を断ち、83年には降伏させて、台湾を領土に組みこんだ。こうして清朝統治の基礎が固まった。

清の皇帝は、中国歴代王朝の伝統を継ぐ皇帝であると同時に、満洲人やモンゴル人にとってはモンゴル帝国の伝統を継ぐ遊牧社会の君主でもあった。清の前半には、康熙帝・雍正帝・乾隆帝と有能な皇帝が続き、彼らはこの2つの面を兼ね備えて独裁的な権力をふるった。平常は北京

① 福建地方の軍事・貿易の実力者鄭芝竜を父とし、日本人を母として平戸で生まれた。明の滅亡後、明の遺王をたすけて活動し、明朝の姓である朱姓を賜ったので国姓爺とも呼ばれる。

② 海禁の徹底のため、沿海の住民を内地に強制的に移住させ、沿岸を無人化するなどの政策がとられたが、鄭氏の降伏後、海禁は解除された。

清は第3代順治帝



康熙帝

李自成一を破って北京を占領した。

Q 本書は、康熙帝に仕えたイエズス会宣教師ブーヴェ(1656～1730)が、フランス王に捧げたものである。この時期のフランス王はだれだろうか。また、ブーヴェは康熙帝のどのような点を評価し、何を期待しているのだろうか。

ブーヴェ『康熙帝伝』(1697年)

いやしくも帝王たる者はキリスト教信仰の美質を備えていなければなりません。……この帝王(康熙帝)は今なお不幸にも偶像教の信仰にとらわれておられます。しかし、この帝王の行動はもともと半ばキリスト教的でありますので、神がこの帝王にも聖なる教えの資質を与えてくださることを私どもは期待しております。

……そもそも韃靼人(ここでは満洲人をいう)はつねに戦争を心がけておりますから、一切の武芸を尊んでおります。また漢人は、学問こそ自国のほとんど全備

値だとみなしております。それ故、康熙帝は文武両道に精進して、自己の統治すべき韃靼人にも、漢人にも好感を持たれようと努められたのであります。……

あれほど広大な国内に発生した事件で、多少重大なものならば、すべて皇帝の御前に運び出されますが、この山のような国務の裁決も、康熙帝に対しては、一種の娯楽に過ぎないと思われるほど、皇帝は国家の政治の裁決において流れるがごとき手腕を得られたのであります。

(後藤末雄訳『康熙帝伝』)



紫禁城の太和殿 明清時代の宮殿であった紫禁城(現在の故宮)の正殿。3層の大理石の基壇をもち、儀式などをおこなうところであった。

獵場での暴れ馬乗り(カスティリオーネラ作「木蘭図」) 清朝皇帝は内モンゴルの獵場へ巡幸し、巻き狩りやモンゴル相撲などをおこなって、その權威を示した。

の紫禁城で政務を取り、夏の数カ月は北方の獵場や離宮で過ごして、狩りなどをおこなうことが、清代前半の皇帝の習慣であった。



17世紀末以降、清の支配領域は大きく広がった。康熙帝の時代には、

当時アムール川沿いに南進していたロシアと戦い、1689年にネルチンス

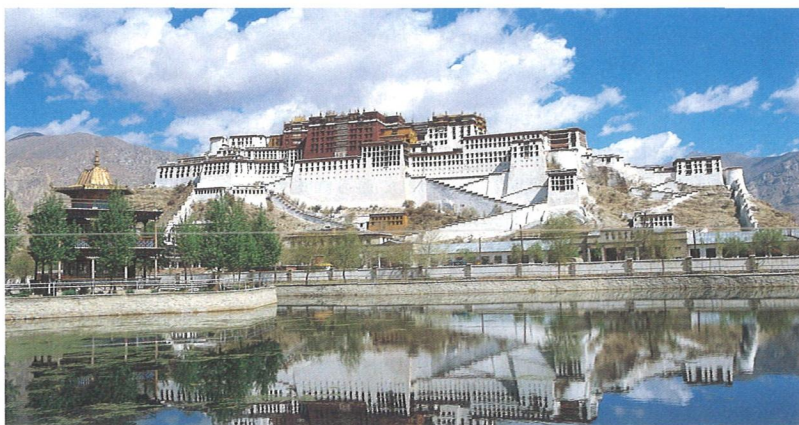
ク条約①を結んで国境を定めた。また、ジュンガル②を破って外モン

ゴルを支配するとともに、モンゴル人に大きな影響力をもつチベット仏教の本拠地であるチベットにも勢力をのびし、チベット仏教の守護者の地位をめぐってジュンガルと対立した。乾隆帝の時代には、ジュンガルを滅ぼして東トルキスタン全域を占領し、これを「新疆」(「新しい領土」の意味)と名づけた。

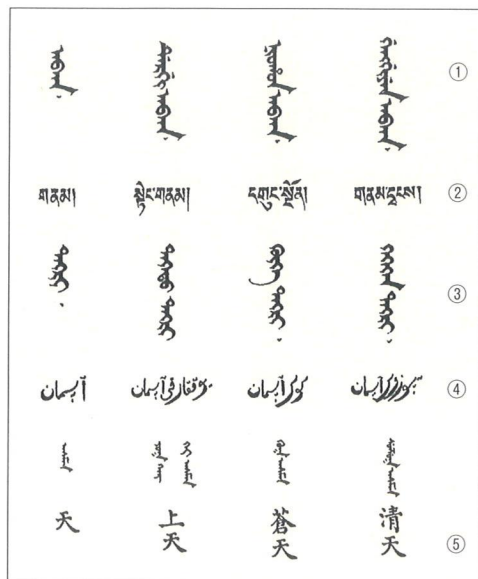
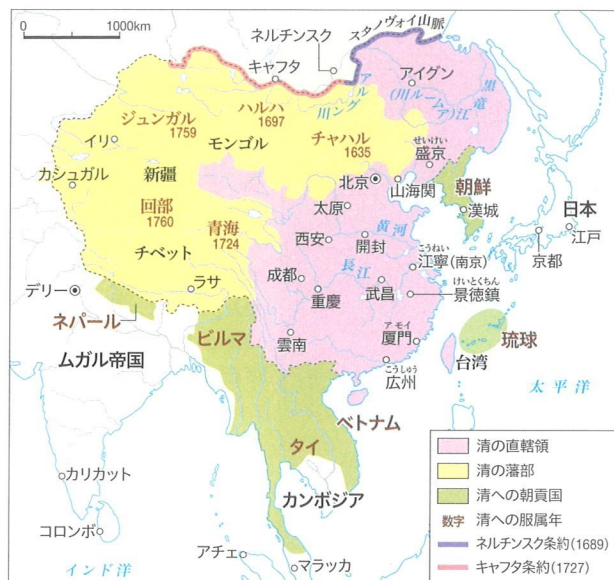
①アルゲン川とスタノヴォイ山脈(外興安嶺)を両国の国境とした。イエズス会士も通訳として会議に参与し、ヨーロッパの国際法に準拠した対等の形式で条約が結ばれた。

②オイラト系(→p.152)の集団で、17世紀に天山山脈西北の草原地帯からトルキスタン・青海・チベットや外モンゴルに進出し、中央ユーラシアに最後の遊牧帝国を築いた。

ラサのポタラ宮殿 岩丘上に築かれた壮大な宮殿で、ダライ=ラマが居住し、チベットの政治・宗教の中心であった。ラサは標高3600m、宮殿の最高部の高さは市街地からおよそ90mある。



清の第5代皇帝雍正帝は、1727年にロシアとキャプタ条約を結んで、モンゴル方面の国境を画定した。



清代のアジア(18世紀後半)

清の広大な領土のうち、直轄領とされたのは、中国内地・東北地方・台湾であり、モンゴル・青海・チベット・新疆は藩部として理藩院に統轄された。モンゴルではモンゴル王侯が、チベットでは黄帽派チベット仏教の指導者ダライ=ラマ^③らが、新疆ではウイグル人有力者(ベグ)が、現地の支配者として存続し、清朝の派遣する監督官とともに、それぞれの地方を支配した。清朝はこれら藩部の習慣や宗教にはほとんど干渉せず、とくにチベット仏教は手厚く保護して、モンゴル人やチベット人の支持を得ようとした。

清と東アジア・東南アジア

▶ 明代と清代とでは、周辺諸国と中国との関係にどのような違いがみられるだろうか。

清の最盛期には、東アジア・東南アジアの諸国が清に朝貢をおこなっており、清はこれら諸国を理念上、属国とみなしていた。しかし、各国の内部では、それぞれ独特の国家意識が成長していた。

16世紀以降の朝鮮では、科擧制のなかで両班といわれる有力な家柄が官僚の大部分を占めるようになり、政治上の実権をめぐって競争を繰り返した。この競争は朱子学の学派争いとも深く結びついていた。豊臣秀吉の侵攻で大きな被害を受けた朝鮮では、明の救援に対する恩義の意識が強かったが、明の滅亡に先立ち、清の侵攻を受けて、その朝貢国とならざるをえなかった。しかし、北方民族出身の清に対する両班の反発は

清朝中期につくられた辞書

『五体清文鑑』 清朝で使われていた5つの言語、すなわち、①満洲語・②チベット語・③モンゴル語・④ウイグル語・⑤漢語を対象とした辞書である。

③14世紀から15世紀初めに、ツォンカバ(1357～1419)が開いた黄帽派チベット仏教の教主。16世紀後半にモンゴルのアルタン=ハーン(→p.154)が黄帽派に帰依し、ダライ=ラマ(ダライは大海、ラマは師の意)の称号を贈ってから、代々この名称で呼ばれるようになった。ダライ=ラマをはじめるチベット仏教の高僧は活仏といわれ、その地位は転生(生まれかわり)によって受け継がれるものとされた。



「琉球貿易図屏風」旗やのぼりを立てたカラフルな進貢船の帰港を迎える那覇港のにぎわいを描いている。琉球の進貢船は、秋に中国に向かい、春に帰港した。薩摩藩は琉球を通じ、中国の生糸や薬品などを買い入れていたため、薩摩藩の和船も描かれている。なお、琉球は、国王や将軍の代替わりごとに、江戸にも使節を送っていた。

強く、朝鮮こそ明を継ぐ正統な中国文化の継承者だとする「小中華」の意識から、儒教の儀礼が中国以上に厳格に守られた。

琉球は、17世紀初めに薩摩の大名島津氏の攻撃を受けてこれに服属したが、中国への朝貢は続け、日本と中国に「両属」する状態となった。そのなかで、日本・中国双方の要素を含む琉球独特の文化が、首里城を中心に形成された。日本では、16世紀半ばに勘合貿易が途絶してからは、中国とのあいだに朝貢関係が復活することはなく、また1630年代の「鎖国」の後、江戸幕府は対外関係をきびしく統制した。しかし、長崎における中国・オランダとの貿易、対馬を通じての朝鮮との関係、薩摩藩・琉球を通じての中国との関係、松前藩を通じてのアイヌとの交易など、隣接諸地域との交流は江戸時代を通じて続いた。幕府や諸大名の保護を受けて、朱子学を中心とする儒学が広く学ばれたが、一方で、日本独自の

朝鮮通信使行列絵巻 江戸時代には、朝鮮や琉球から派遣された使節が、華やかな行列で江戸に向かった。これらの使節は、将軍に対する外国の敬意の表現とみなされ、その行列を日本人が見物することは、幕府の権威の強化につながった。



文化に対する関心も強まり、外來の儒学を排して日本古來の精神に戻ろうとする国学が盛んになった。また、オランダを通じて流入した医学など西洋科学への関心も高まった。経済面では、従来は輸入に頼



17世紀のバタヴィア ジャワ島西部に位置する港町でジャヤカルタと呼ばれたが、この地に進出したオランダが1619年にバタヴィアと改称して以来、オランダ領東インドの拠点として栄えた。

っていた生糸など手工業製品の国産化が進み、自立的な経済構造が形成されていった。

東南アジアの諸島部では、17世紀末以降、現地政権が倒れてオランダの支配が進んだ。一方、大陸部(インドシナ半島)では、ビルマのタウングー朝が南部のモン人などの侵攻で倒れたのち、新たにコンバウン朝が成立したのをはじめとして、18世紀半ばから19世紀初めにかけて、タイ

のラタナコーシン朝(チャクリ朝)、ベトナムの阮朝など、新王朝がつぎつぎに成立した。これらの新王朝は、政治的基盤を固めるため名目的に清の冊封を受けたが、実際には中国と対等な自立した国であるという意識が強かった。18世紀の東南アジアでは、中国経済の活況とともに中国

船による貿易が増大し、諸島部でも大陸部でも、中国からの移住者が経済面で大きな力を握った。彼らは時に現地政権の弾圧を受けることもあったが、会館などの相互扶助機関をつくって、東南アジア各地の社会に根づいていった。

① 在外の中国系の人々は「華僑」とも呼ばれるが、「僑」とは仮住まいの意味である。現代では、移住先で国籍を得て代々定住する場合が多いことから、これら中国系の人々を「華人」と称することが一般的となっている。

清代中国の社会と文化

Q▶ 漢人の社会や文化に対して、清朝はどのような態度をとったのだろうか。

人口や経済力で圧倒的な比重を占める漢人の居住地域(もとの明の領土)をどのように統治するかは、清朝にとって重要な課題であった。清朝は、科挙・官制などにおいては明の制度をほぼ受け継ぎ、儒学を振興して中国王朝の伝統を守る姿勢を示した。一方で、軍制では漢人で組織する緑営のほか、満洲・モンゴル・漢で構成される八旗を要地に駐屯させた。また、中央官制の要職の定員は満・漢回数とし、皇帝直属の諮問機関の軍機処を設置するなど、独自の制度も創設した。さらに清朝は



辮髪 辮髪を拒み、髪を伸ばして結い上げる漢人の伝統的髪型を維持することは、それだけで清朝への反抗を意味した。

① 書物のなかの反満・反清的な文字を摘発し、その作者をきびしく処罰した。

② タバコ・トウモロコシ・サツマイモなどはいずれも、アメリカ大陸から伝来した新作物であった(→p.161)。



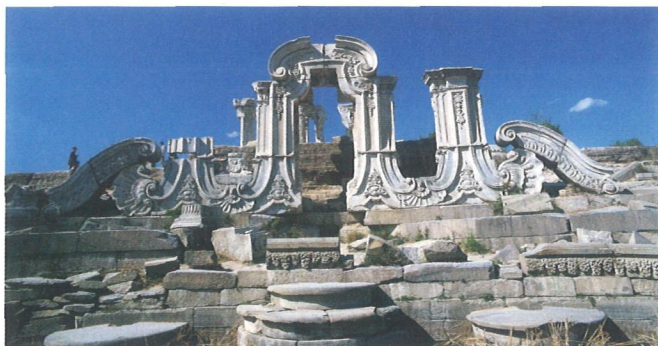
八旗兵 満洲人の故郷である中国東北地方では、冬季に河川が凍結するため、氷上の移動が軍事的に重要であった。図は、北京の紫禁城の太液池でおこなわれていた八旗兵による氷上演習の光景。

『康熙字典』『四庫全書』など、大規模な編纂事業をおこして学者を優遇する一方、反清的言論に対しては文字の獄①や禁書を通じ、きびしく弾圧した。漢人男性には満洲人の髪形である辮髪②も強制した。

台湾の鄭氏の降伏後、清朝は海禁を解除し、海上貿易は順調に発展した。生糸や陶磁器・茶などの輸出によって中国には銀が流れ込み、東南アジアに移住して商業活動をおこなう華人も増えた。18世紀半ばに、乾隆帝は治安上の理由からヨーロッパ船の来航を廣州1港に制限し、行商という特定の商人たちに管理させたが、その後も貿易量は増え続けた。18世紀には政治の安定のもと、中国の人口は急増し、山地の開墾が進んだ。山地ではタバコや藍などの商品作物がつくられ、またトウモロコシやサツマイモなど、山地でも栽培可能な自給作物が山地での人口増を支えた③。税制では、18世紀初めの地丁銀制により、丁税(人頭税)が土地

広州の外国商館 外国商人は町なかに住むことを許されず、川沿いの特別区域に商館をたてて居住した。こうした外国人隔離政策は日本における長崎の出島などでもみられた。





円明園 円明園は雍正帝から乾隆帝の時期到北京郊外に建設された離宮。バロック様式の西洋建築を含む広大な庭園であったが、第2次アヘン戦争(→p.253)の際の英仏軍の略奪・破壊によって、廃墟と化した。



カステリオーネが描いた乾隆帝

税に繰り込まれて制度の簡略化がはかられた。

文化面での清代の特徴は、精密さや繊細さという言葉で表すことができる。明清交替の動乱期を経験した顧炎武など清初の学者は、社会秩序を回復するには現実を離れた空論でなく、事実にもとづく実証的な研究が必要だと主張した。その主張は清代中期の学者に受け継がれ、儒学の經典の校訂や言語学的研究を精密におこなう**考証学**が発達した。また、『**紅樓夢**』など清代中期の長編小説も細密な筆致で上流階級の生活を描写し、多くの読者をひきつけた。

清朝は、イエズス会の宣教師を技術者として活用した。暦の改訂をおこなった**アダム＝シャール**、ヨーロッパの画法を紹介したり、**円明園**の設計に加わった**カステリオーネ**らはその例である。イエズス会宣教師は布教にあたって中国文化を重んじ、信者に祖先崇拜などの儀礼を認めたが、これに反対する他派の宣教師がローマ教皇に訴えたことから、**典****礼問題**がおこった。教皇はイエズス会の布教方法を否定したため、これに反発した清朝は、雍正帝の時代にキリスト教の布教を禁止した。一方、宣教師たちがヨーロッパに伝えた儒教・**科挙**など中国の思想・制度や造園術などの文化は、ヨーロッパ人のなかに中国に対する関心と呼びおこし、中国と西洋を比較する政治論が戦わされるとともに、芸術のうえでも中国趣味(シノワズリ)が流行した。